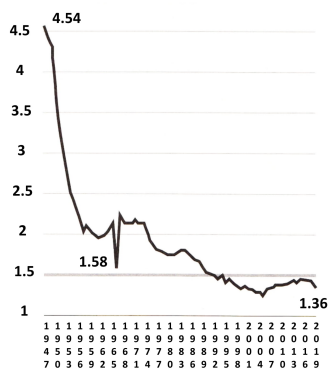


- ・ 合計特殊出生率が低下し続ける日本
～とりとめもなく考えたこと～
- ・ 日本思春期学会に参加して
私のオフタイム
- ～合唱疲れのこの頃～

合計特殊出生率が低下し続ける日本 ～とりとめもなく考えたこと～

院長 村口 喜代

日本のTFRの推移



「未婚化する日本」より（白秋社編集チーム 編著）

最近、「未婚化する日本」という本を読み、深く考えさせられました。診療の現場でも、なかなか結婚しない女性が増えていることを感じていましたので、なるほどと思うことがありました。

下がり続ける日本の合計特殊出生率 TFR (Total Fertility Rate)

2021年度の合計特殊出生率が報告されましたが、またまた低下し1.30でした。日本のTFRは私が医師になってまもなく1975年から恒常的に2.0を下回り始めました。つまり親世代人口を下回る子世代人口となるTFRが続いています。そして1995年以降は1.5を恒常的に切っています。“ふるさと人口減少、空き家急増、高齢化加速”そんなニュースが頭をよぎります。

TFR計算のイメージ TFR = 既婚女性の赤ちゃん / 未婚女性 + 既婚女性

15才から49才までの女性の年齢別出生率を合計したものです。各年齢の出生率を求め足し合わせます。つまり、既婚女性も未婚女性も合わせて、生まれた赤ちゃんの割合です。日本の場合は、長期にわたり婚外子の赤ちゃんの比率は2%で推移しており、計算上はほとんどが既婚女性の赤ちゃんとなります。

TFRが低下し続けるのは、未婚女性が増えているからです

1970年に生まれた赤ちゃんは193万人、2019年には87万人と、半世紀たらずに45%水準まで減少しました。婚姻総数はこの間に58%水準に激減、うち初婚同士では48%水準に減少しました。

この間に、初婚同士の婚姻数と出生数はほぼ同率（48%、45%水準）で減少しており、初婚夫婦の赤ちゃんの数（ほぼ2.0人前後の水準）の減少というよりは、初婚同士の婚姻数の激減が日本の少子化の決定的要因だったとみてとれます。

未婚化が進み続ける日本

50歳時の未婚割合をみると、1970年は、男性1.7%、女性3.3%でした。その後、男性は一貫して上昇する一方、女性は1990年まで横ばいでしたが、以降上昇を続け、2020年は男性28.3%、女性17.8%と、それぞれ上昇しています。男性は3.5人に1人、女性5.6人に1人です。

18歳から34歳の未婚・男女の「交際相手がいない」割合が上昇しており、2015年度の調査では男性69.8%、女性59.1%です。男性85.7%、女性89.3%が「いずれ結婚するつもり」と答えていますが、「独身でいる理由」を問うと、男性45.3%、女性51.2%が「適当な相手にめぐり合わない」と答えています。女性が結婚相手に求める条件として「三高」（高収入、高学歴、高身長）という言葉がバブル期に流行しました。今は、経済力がダントツで、価値観、人柄（女性のライフスタイル支援を行うライフコンサルタント・奥井まゆ）とのことです。経済力は30年経った今でも変わらずとの結果です。

日本社会はどうなるのか

日本経済の減速・低迷が続く限りは、少子化問題の好転化、婚姻率の増加は望めないと思います。若者の非正規雇用者の割合は、2005年以降横ばいが続いており、男性20%台、女性50%台を継続しています。この状況は、もうしばらくは続くことでしょう。

男女平等の流れは歴史の必然、時代の要請です。今この時、この時代をどう生きていくかは、男性、女性・・・一人ひとりに同等に託されたものと心得、現在進行形で、毎日生きていかなければなりません。経済的に恵まれなくても、力を合わせて生きていこう、そうした男女・カップルが増えて欲しいと願わずにはおれません。1+1=2以上、無限大に・・・“若さは最大の武器、財産である”と信じたいと思います。

日本思春期学会に参加して

看護師主任 早坂恵



2022年9月に開催された、第41回日本思春期学会の学術学会に参加しました。コロナ感染拡大の中ということで、3年連続のオンラインでの開催でした。学会のテーマは「思春期を支援するための科学的根拠をもと」です。学会は、教育講演、シンポジウム、ワークショップ、一般演題と盛り沢山で、医療の分野に限らず、社会学、教育学、子育て、包括的性教育、そして宇宙医学など、様々な視点から思春期に向き合い、その支援について考えるというとても興味深い内容でした。

当クリニックからは私が「思春期女子の人工妊娠中絶からみえてくるもの～プライマリーナーシングの重要性を問う～」という演題で発表しました。プライマリーナーシングとは担当の看護師が一貫して関わる看護のことです。患者さんと関わる度にいつも感じていたのは性教育の大切さでした。性教育というと、“学校の保健体育の授業で習うもの”といったイメージを持つ方がほとんどではないでしょうか。それ以外での性教育の機会となると、個人差があると思います。自分の身体やそ

の働きについてきちんと理解できている方は、思春期に限らず少ないと感じています。そして、性教育とは単に月経、妊娠、避妊を学ぶことではなく、思春期前からの家庭で始まっていることに改めて気づかされました。子どもの頃からジェンダーバイアスがない働きかけが重要ということ。自分を大切にすることと同じように、相手を大切に思い尊重し、そのことにより多様性を受け入れる心を育てること。その心の基盤が出来た上で、思春期に正しく十分な性教育を受けることが出来たら、予期せぬ妊娠や性感染症、デートDVの被害者も加害者も減少に繋がるのではないかと感じています。

今回の学会は、「思春期」を医療の視点だけでなく、様々な職種や立場から知ることができ、自分の視野を広げる機会になりました。この経験を日々関わりの中で活かせるよう心がけながら、学びをさらに深めていきたいと思っています。

私のオフタイム ～合唱疲れのこの頃～

仙台市立病院名誉院長 東岩井 久 先生

このところ、合唱の練習でいささかバテ気味となっている。コロナの影響で3年ぶりに開催された「茶畑男性合唱団（仙台一高OBで結成）」と宮一女OG合唱団の合同発表会が9月4日に終わり、続いて9月23日に開かれた演奏会（海鋒義美先生の音楽活動を顕彰する会）に、私が所属する「HKジュニアコーラスGサンズ」も参加したのだ。

海鋒先生には、私が小学生の時に参加していたNHKの仙台放送児童合唱団でご指導をいただいた。当時の私は、海鋒先生が東北地方の学校の校歌を200曲以上作られた偉い先生などとは全く知らず、温容をもって丁寧に指導してくださる先生だと思っていた。

2年前に「東北歌の本」が刊行されたが、そこには海鋒先生を中心とした先生方が作曲し、我々が仙台の放送局から週に一度、生放送で歌った曲が集められている。戦後間もない時期に、それらの音楽活動が東北の児童文化に果たした役割は非常に大きなものであり、現在も当時を懐かしむ隠れファンがたくさんいる。

80歳を過ぎ、2時間の舞台を務めることが苦しくなり、高音域の音を、長時間音程を正しく歌うことは辛くなり、老いを感じさせられるこの頃である。



臨時休診

○年末年始の休みは、
12月30日（金）の午後から、
1月5日（木）までとなりますので
ご了承ください。

編集後記

秋の爽やかな空気が心地よい季節、2022年最後のきよくりNEWSとなりました。
今年も新型コロナウイルス感染は変わらずでしたが、いろいろなところでリアルな会も再開し始め「WITH コロナ」の空気が流れてきましたね。

みなさまにとって、幸せな1年の締めくくりとなりますように ☺

発行元：村口きよ女性クリニック

http://www.muraguchikiyo-wclinic.or.jp

e-mail: con@muraguchikiyo-wclinic.or.jp

